



令和2年 10月 28日
佛教大学附属幼稚園

「仏教保育 11月のねらい」

精進努力

「小さな努力」

園長 佐藤和順

日中は暖かく穏やかで、空は澄み渡り秋を感じる好季節となりました。どんぐりを拾ったり、紅葉を目にしたりと子どもたちはそれぞれの秋を楽しんでいます。

今月の保育の目標は「精進努力(しょうじんどりょく)最後までやりとげよう」です。途中でくじけては、どんな小さなことも実りません。すべてを終わりまで粘り強くやりとげること、子どものときから習慣づけることが大切だということです

以前、年長児が「砂場に来て」と呼びに来てくれました。行ってみると大きな山ができて、その山にはトンネルも掘ってありました。子どもたちは大きな山を作るために毎日砂を盛って、砂を盛って、砂を盛って。3日目ようやく完成したようです。子どもたちの目はとてもキラキラし「すごいでしょ!」「こんなに大きなのが造れた」と、自信に満ちていました。その砂山を眼の前にして、ある子どもから「水を流したい」「川を作りたい」という意見が出ました。いざ流してみるとすぐに水が砂に沁み込み、流れるには至りません。すると別の子から「いっぱいの水を流そう」「砂を固めて下に落ちないようにしよう」と様々な意見がでました。手分けをして挑戦すると水が流れ、池も作ることができました。その後、他の学年の子どもも参加し、火山を作ろうと頑張っていました。

精進努力というと「自分には出来っこない」「壮大な目標を持たないといけないのでは」と、思ってしまいがちです。しかし、砂場でのエピソードも精進努力の一つの姿です。

子どもたちの「やりたい」「やるんだ」「面白そう」と思う気持ちがその原動力です。そのような場面に出会ったら、手は出さず、そばで見守ってみてください。私たち大人は、つつい手を貸したくなったり、経験から「こうした方がいいよ」「そうするとこうなるよ」など忠告してしまいがちです。これは、先回りして失敗という大切な経験を子どもから奪うことにもなってしまいます。失敗からわかること、失敗を通して次にどうすれば良いかを考えること、このことが幼児期の大切な学びなのです。子どもを信じて待つあげることも大切です。そして、できた時にはしっかりとほめるというより、一緒に喜びましょう。小さい身近な精進努力が、大きな精進努力の種となるのです。

